

新約聖書 ヨハネによる福音書 11章 32節—44節 (新共同訳)

³² マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。³³ イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、³⁴ 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。³⁵ イエスは涙を流された。³⁶ ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。³⁷ しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。

³⁸ イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。³⁹ イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と言った。⁴⁰ イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と言われた。⁴¹ 人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。⁴² わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」⁴³ こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。⁴⁴ すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「涙をぬぐい取る」

「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに」(ヨハネ 11:32)。マリアは、イエスを見るなり、イエスの足もとにひれ伏してこう言いました。

ここには、愛する兄弟のラザロを失ったマリアの嘆きと悲しみが表されています。

マリアや他のユダヤ人たちが泣くのをみたイエスは、「憤りを覚え、興奮して」、「どこに葬ったのか」と言いました(ヨハネ 11:33-34)。そしてまた、イエス自身も涙を流したのです。

「イエスは涙を流された」(ヨハネ 11:35)。

この短くシンプルな聖句は、特別な意味をもっています。キリストが人間の悲しみと共に、その傍らに立ち、一緒に泣いてくれるという深い慰めと愛がそこにあります。

イエス・キリストが神の子であるならば、悲しみや怒りなどの人間的感情を超越した存在であるかのように思いかねませんが、そうではありません。

旧約聖書のホセア書には、神の言葉として「わたしは激しく心を動かされ／憐れみに胸を焼かれる」（ホセア書 11:8）と記されています。「憐れみに胸を焼かれる」。この言葉は、まさにイエスのこの時の思いを言い表しているのではないのでしょうか。

愛するラザロの死を前にして流したイエスの涙は、死という悲しみの事実直面したイエスの深いシンパシー、共感・共苦の涙です。イエスは血と涙をもち、心を痛める人間として、ラザロの死に接したのです。

ユダヤ人たちはそれを見て、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言いました（ヨハネ 11:36）。

ユダヤ人たちは、イエスの涙を見て、イエスの愛の深さと、それでもどうすることもできないラザロの死、抗うことのできない悲しい定めを感じたのではないのでしょうか。

この時点では、ユダヤ人たちにとって、ラザロの死に対する最大の慰めはイエスの流した涙であり、このあとにラザロが生き返るとは予想だにしていなかったでしょう。

そこには、イエスの涙する姿に深く心を打たれた者もいれば、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようににはできなかったのか」と言う者もいました（ヨハネ 11:37）。

そしてイエスは、「再び心に憤りを覚えて」ラザロの墓に来ました（ヨハネ 11:38）。

「イエスは涙を流された」という「涙を流す」（ギリシア語でダクリュオー）という言葉は、いわゆる号泣、大声を上げて泣く、というのではなく、はらはらと涙を流すという、しみじみとした悲しみの表現です。

「再び心に憤りを覚えて」とは、静かに悲しみの涙を流していたイエスが、再び憤り、闘いに挑む態勢に入っていることを表していると思います。

ラザロの墓の前でイエスは「その石を取りのけなさい」と言いました。当時の墓は、ほら穴のようなところであったようですが、そこに大きな石のふたを置きました。死臭が外に洩れるのを防ぐためであったと思われます。ラザロのもう一人の姉妹マルタは「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」と答えました。

マルタの言葉には、墓石をとりのけるように指示するイエスの言葉に躊躇し抵抗する気持ちが表れています。

そんなマルタに、イエスは「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか」と、ご自分がかつて伝えたことを思い出させようとした（ヨハネ 11:40）。

墓石は、人間の生と死を分ける、二つの世界の間の扉です。イエスは、その墓石を取り除けるように命じます。

一人の力では動かせないほど大きく重い墓石を、人々が取りのけると、イエスは天を仰いで言いました。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します」（ヨハネ 11:41）。

ここでイエスが「天に向かって祈った」ではなく、「天を仰いで言」われたと記されていることには意味があると思います。

祈りという言葉からは、目を閉じ頭を下げる姿がイメージされると思います。

しかしここでイエスが「天を仰いで言」ったと記されていることから、イエスが天を仰いで、神に語りかけているような印象を受けます。

ここには、ラザロを復活させることが、イエスと天なる神との一致、イエスと神との一体性によってなされるものであることが示されています。

イエスが祈ったがゆえに、神がその祈りを聞いてラザロを復活させるのではなく、イエスの意志が、即、神の意志なのです。

「ラザロ、出て来なさい」とイエスが大声で叫ぶと、死んでいたラザロがよみがえり、墓から出てきました。

イエスの呼びかけ、イエスの愛によって、ラザロは復活したのです。

本日の福音書は、「ラザロの復活」と呼ばれる、家族や大切な人の死について深く考えさせられる箇所です。

ラザロを復活させる直前の、イエスの神への語りかけが印象的です。

イエスは、天を仰いでこう言いました。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています」（ヨハネ 11:41-42）。

ここには、完全に肩の力を抜いて、神にすべてを委ねきっているイエスの姿があります。

かけがえのない人の死が間近に迫っていたり、その死に立ち会う時、私たちにさまざまな思いが募ります。

そのような中で、必死で求め懇願して祈ることが、私たちに必要な時もあるでしょう。

そしてまた私たちには、こうなって欲しいという人間的願いからくる思いを、天に向けて解放し、手放して、すべてを完全に天に委ねることになっていく時もあるでしょう。

本日は、全聖徒主日です。

人は、亡くなって天に召されても、この地上に生きている私たちの心の中に生き続けているのだと思います。

天に召された方たちを覚え、感謝のうちに祈りを捧げましょう。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 25章6節—9節（新共同訳）

⁶ 万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。⁷ 主はこの山で／すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼし／⁸ 死を永久に滅ぼしてください。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってください。これは主が語られたことである。⁹ その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

新約聖書 ヨハネの黙示録 21章1節—6節（新共同訳）

¹ わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。² 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。³ そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にある、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、⁴ 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもの過ぎ去ったからである。」

⁵ すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。⁶ また、わたしに言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。」

教会讃美歌 171 番「つくりぬしを」1,2,4 節、382 番「ここは神の」1,2,3 節、371 番「いつくしみ深き」1,2,3 節、394 番「主よ終わりまで」1,2,4 節。